

3.5 「^{そうねんぶけっせい きねんび}壮年部結成記念日」

1 枚目／^{こうふ おうごんばしら そうねんぶ}広布の“黄金柱”壮年部 （5 枚目の絵の裏に貼る）

壮年部の「壮」の字には、「^{つよ}強い」「^{おお}大きい」との意味があります。それは、“^{いさ}勇ましさ”の象徴です。

一家の柱、社会の柱として活躍する壮年部の友に、池田先生は「壮年部は広布の黄金柱である」との大きな期待を寄せられています。

2 枚目／「^{そうねんぶ}壮年部」の結成への思い （1 枚目の絵の裏に貼る）

池田先生が創価学会第3代会長に就任されて6年目の1966年、池田先生は壮年部の設置を発表されました。

当時は、最高幹部の人事、理事長の交代、総務制の設置など、学会の様々な体制が新出発を迎えている時でした。

池田先生は、壮年部結成への思いを後にこう綴られています。

「壮年部が健在であってこそ、婦人部も、男女青年部も、安心して戦える。

大切な、大切な学会家族を護り抜く黄金柱よ、威風堂々たれ！——これが、自ら壮年として指揮を執られた牧口、戸田両先生の願いであったとあってよい。この心を実現するため、私は壮年部をつくったのだ」

3枚目／結成式 3月5日／「妙法の名将」たれ （2枚目の絵の裏に貼る）

1966年（昭和41年）3月5日、学会本部で行われた壮年部結成式の席上、その前途を祝して、池田先生が書き上げられたばかりの巻頭言が朗読されました。

そこでは、「妙法の名将」と題して、6つの指針が挙げられています。

第1に御本尊への絶対の確信。

第2に難事をも成し遂げゆく力。

第3に社会のすべてに通暁し、職場で勝利する世雄（立派な社会人）。

第4に後輩を育成していく熱意。

第5に人間性豊かな包容力ある指導者。

第6に旺盛な責任感と来るべき事態を予見し着実な手を打つ計画性――

池田先生は結成式に出席された翌日には、南米・北米指導に旅立たれ、移動の機中から見えるアマゾン川に、壮年部結成への想いを馳せられました。

「窓を覗くと、地平線は明るみ、眼下には雄大なアマゾンの大河が見えた。この大河の如く、世界広宣流布の悠久の流れを開いてみせる――そのための重大な“画竜点睛”こそ、壮年部の結成であったのだ」――と。

4 枚目／^{そうねん}壮年の力^{ちから}（3 枚目の絵の裏に貼る）

日蓮大聖人のご在世^{ござい}当時^{とうじ}も、中心^{ちゅうしん}となって活躍^{かつやく}したのは、壮年信徒^{そうねんしんと}でした。

青年^{せいねん}のイメージが強い四条金吾^{しじょうきんご}も、竜の口の法難^{たつのくち ほうなん}、主君^{しゅくん}への折伏^{しやくぶく}など、果敢^{かかん}に戦^{たたか}いぬいたのは 40 代半ばからと言^いわれています。

また、富木常忍^{と き じょうにん}、大田 乗明^{おおた じょうみょう}、曾谷教信^{そ や きょうしん}などの門下^{もんか}も、今の壮年部^あに当たる世代^{せだい}の時に、必死^{ひっし}に門下^{はげ}を励まし、大聖人^{だいせいじん}をお守^{まも}りしたのです。

池田先生^{いけだせんせい}は語^{かた}られています。

「壮年^{せいねん}たちが、今^{いま}こそ立ち上^あがろうと、勇猛果敢^{ゆうもうかかん}に戦^{たたか}い、同志^{どうし}を励ましていったからこそ、大法難^{だいほうなん}のなかでも確信^{かくしん}の柱^{はしら}を得^えて、多く^{おほく}の人びとが、信仰^{しんこう}を貫^{つらぬ}き通^{とお}せたにちがいない。壮年^{せいねん}がいれば、皆^{みな}が安心^{あんしん}する。壮年^{せいねん}が立てば、皆^{みな}が勇気^{ゆうき}を燃^もえ上^あがらせる。壮年^{せいねん}の存在^{そんざい}は重^{おも}い。その力^{ちから}はあまりにも大^{おお}きい」

5 枚目／^{せいねん}青年の心意気^{こころいき}で！（4 枚目の絵の裏に貼る）

池田先生^{いけだせんせい}は、壮年部^{そうねんぶ}に対し次^{つぎ}のようにご指導^{しどう}して下さ^{くだ}っています。

「今^{いま}、日本^{にほん}の国では青年^{せいねん}が少^{すく}なくなっている。「壮年部^{せいねんぶ}」即^{すく}「青年部^{せいねんぶ}」——それぐらゐの心意気^{こころいき}で進^{すす}むことだ。この点^{てん}を先^き取りし、若々^{わかわか}しい気概^{きがい}に燃^もえる人^{ひと}は、勝^かっていける。団体^{だんたい}も、国^{くに}も、青年^{せいねん}の心で勝利^{しょうり}していける。」と。

また、「大事^{だいじ}なのは「今^{いま}」である。壮年^{せいねん}が立ち上^あがるのだ。広布^{こうふ}のため、同志^{どうし}のために、たとえ自分^{じぶん}はどうなっても、「この私^{わたくし}の姿^{すがた}を見^みてくれ！」という戦^{たたか}いを、青年^{せいねん}の胸^{むね}に残^{のこ}していくのである」ともスピーチして下さ^{くだ}いました。

私たちも池田先生^{いけだせんせい}の弟子^{でし}として、青年^{せいねん}の心意気^{こころいき}で師匠^{ししょう}にお応^{こた}えして参^{まゐ}りましょう。

決意^{けつい}など